

ここで少し、ぼくの話をしませう。

小学校の頃、「漫画家になりたい」という夢を抱きました。

それが中学生になった頃、漫画家という職業は、なりたいたいからといってなれるものではない、と気づいたのです。そこで、「映画監督もいいな」「新聞記者はどうだろう」などと考えて早稲田大学に進学。漫画研究会に所属して似顔絵や一コマ漫画を描いていましたが、だからといって漫画家になろうとは思っていませんでした。

大学を卒業したぼくは、松下電器産業（現在のパナソニック）に入社しました。メーカーの宣伝部に入れば、ポスターやカタログの制作など、絵を描くという自分の特技を生かした仕事ができるだろうと考えたのです。

同期入社は、理系の研究職を除いても450人ほどいました。そのうち広告宣伝物の制作などを担当する「営業本部販売助成部」に配属されるのは一人か二人という狭き門です。

「宣伝以外の仕事はやりたくない」と思っていたぼくは、そこで、所属が決まる前の新人研修中に猛烈にアピールすることにしました。

毎日提出するレポートに、宣伝に対

捨てる練習

文 弘兼憲史

text by Kenshi Hirokane

する熱意をびっしりと書き込み、販売実習では手作りの販促物を提案するなど、懸命に自分を売り込んだのです。そんな「運動」が功を奏したのか、ぼくはめでたく販売助成部に配属され、販促物の制作やショールームのデザイナーなど、それなりに楽しく、やりがいのある仕事に就くことができました。

右肩上がりの高度成長期だったので、初任給は4万1000円でしたが、2年目には8万円を超え、3年目には12万5000円になりました。

仕事も楽しいし、収入も増えていく。

もちろん、仕事ですからいいことばかりではないけれど、これといった不満もなく、順調なサラリーマン生活を送っていました。それでも、当時は気づきませんでした。心の片隅に、早々に漫画家になることをあきらめてしまった自分がいたのです。

入社3年目のある夜、仕事上で知り合った若いデザイナーと酒を飲み、時間も遅くなったので彼の家に泊めてもらったことがあります。

深夜、寝ていたぼくがふと目を覚ますと、彼は背中を丸めて机に向かっていました。そのデザイナーは漫画家志望で、寝る間を惜しんで漫画を描いて

いたのです。

その後ろ姿を見たぼくは、愕然としました。

「このままじゃいけない」——心の底から、そう思ったのです。

「漫画家になりたい」という夢を、挑戦する前からあきらめていた。

自分を誤魔化していた。もっと言えば、自分に負けていた——と感じたのです。



捨てる練習
プレジデント社
708円(税込)

Profile

1947年、山口県生まれ。早稲田大学法学部卒業。松下電器産業（現パナソニック）に勤務後、74年に『風薫る』で漫画家デビュー。『島耕作』シリーズや『ハロー張りネズミ』『加治隆介の議』など数々の話題作を世に出す。『人間交差点』で小学館漫画賞（84年）、『課長島耕作』で講談社漫画賞（91年）、講談社漫画賞特別賞（2019年）、『黄昏流星群』で文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞（00年）、日本漫画家協会賞大賞（03年）を受賞。07年には紫綬褒章を受章。人生や生き方に関するエッセイも多く手がけ、『弘兼流 60歳からの手ぶら人生』（海竜社）、『弘兼流やめる！生き方』（青春新書インテリジェンス）などの著書がある。